



特 260 6
153 0

形
單

昭和改訂版
肉十八

始



邯鄲

(梗概) 唐土蜀の國に廬生と言へる者、楚國の羊飛山に聖僧住めりと聞
 き身の一大事を尋ねん為め同國に赴き、邯鄲の里なる一旅亭に入りぬ。
 亭の主の勧めにて夕餉の粟飯を炊ぐ間名高き邯鄲の枕して一睡しぬ。
 稍ありて楚國の王位を讓るべしとの勅使現れ、廬生を玉の輿に載せて
 導ち、あたりの光景喜見城も斯くやと思ふばかり壯嚴華麗を極め
 程を、大臣來りて一千年の齡を保つべしと言ふ天の濃漿と沆瀣沆瀣を極め
 授けし小童の舞を興するに兼りて其身も立ちて舞など一晝夜四奏のの差
 別なき、日夜の宴樂はや五十年を經しと思ふ頃忽然として宮殿樓閣百
 官卿相を始め物皆一時に消え失せて夢覺めぬ、折節亭の主夕餉を仕度
 して待居たり、廬生茫然自失の体なりしがつらく世上の事を思ふに
 萬事は一炊の間の夢なり、此枕こそ出離を求むる智識なれとて羊飛山
 にも行かず望みを叶へて歸りける。



シテ	盧生
子方	舞人
ワキ	勅使
ワキヅレ	大臣三人
立衆	輿舁二人
所	唐土邯鄲の里
季	不定

邯鄲

^次 ^{引上} 浮世の格は建てひきてく 夏後をい
 つと定めん ^上 抑是は蜀の國に侍は盧
 生と申者あり ^詞 毒人間はあまぐらふ
 ちと輕いぞ ^上 唯忙然とめし 昔は斗あり
 誠や楚國のやう ^羊 ^飛 ^山 ひさんふききき 知識乃

浦一まの由す及びてゆ程よ、是れ一大事

をも尋ん為るは今やうひひくも、セリフ有

上任到一國を雲海の初よんとてキ

と又とを越すまはそいともあるを、キ

世くまいつくも、キ

鄭乃里にも早くいふふらりセリフ有

詞美は是にす及び一形影の松なほ一

是に非更首途乃世に、カドイデ

のよある事、同上

里キ一、日ちまのい、キ

着たるとは、キ

一、キ

子代ぞと葉の酒 葉花乃まよも
 ろづとー 君も豊よ 民 葉へ

國上安全長久のづー 葉花も益増ふ
 於花びらほする草乃 菊は益あごよ
 いまや春ふよめくまや 葉のづー 流ま
 葉水乃流よひくまよ 葉のづー 流ま

先産る葉花の 花乃枝を翫てさ
 まも引も光なるれや 葉の葉花
 そくーま 我宿乃 菊の志る露
 葉花よ 葉世積りそ 葉と成らん
 もそー 葉乃水も泉なるれはくめ
 葉花よ 葉まよ に出る葉花を 飲ま

秋を方おふ子草もどし時子花を咲りり面

白やぬしきあふかへかて時をひきき

をくみ十年の業をもつ手て鉄

夏此うちたれ女清更衣百官郷相

千戸万戸從敷眷属宮殿樓窓

をきこえくと失果くあつる形郷の

枕乃上に眠里の夏ははぬふまり

上 ちし生ハ夏えく 五十七はま秋乃

業花もむよ品忙然と起あぐり

はむらりおるりり 女清更衣乃

あうと笑りも松風の音とあり

殿樓窓ハ只形敷乃仮此宿業を

昭和九年六月廿五日印刷
昭和九年六月三十日發行

定價金五拾錢

著者 佐權 有所



東京市下谷區上根岸町八十二番地

著者 寶 生 新

東京市京橋區銀座西六丁目三番地

發行兼印刷者 江島 伊兵衛

發行所 下掛寶生流謠本刊行會

終

